

■ OnAir 3000 ユーザーレポート

株式会社 IBC 岩手放送 様

OnAir 3000



ラジオのメイン、第2スタジオを OnAir 3000 で更新



株式会社 IBC 岩手放送
ラジオセンター 姉帯 俊之
技術局 技術部 佐々木 真也

IBC 岩手放送では、ラジオ第2スタジオの音声調整卓設備更新にあたり、OnAir 3000を導入し、2009年2月から稼働しています。弊社のラジオスタジオは4室あり、そのうち、この第2スタジオは、主に生ワイド番組に使用しているラジオのメインスタジオです。また、マスター室にも隣接し、緊急編成時やマスター障害時の代替送出にも対応することを想定しています。

旧設備稼働から23年が経ち、卓周辺には多数の機器が増えました。送出素材のメディア種類増、連絡機器や回線端末、リスナーからのFAX・メール受けPCも加わりました。その一方で、ディレクターが卓オペレーターも兼務する体制になり、番組を進行しながら、一人で各機材に目を配らなければなりません。新設備の検討段階では、様々な要望や既存設備のありようなど課題が多く出されました。それらを取りまとめたコンソールの作りはかかなり大掛かりとなり、モックをダンボールで作ってみると、逆に一人運用の足かせとの意見も出されました。また、検討過程で設備予算の見直しもあって、シンプルでコンパクトに構築することが求められました。EQやAUX送りはめつ

たに操作しないので、エンコーダーモジュールやフェーダースクリーンは無しにし、周辺機器も必要最小限に減らしました。コンソールは、18フェーダーとモニターモジュールを埋め込んだテーブル型として、その上にリモコンやOAモニターが自由に並べられる最小限の大きさとなりました。今回は、サブ室全体の物品配置も見直しました。従来は、音声卓を取り囲むように、TRやTTなどが室内中央を陣取り、加えて重厚な電話受け付け台等があり、人の流れを遮っていました。生番組で順番待ちのゲスト出演者などが、所在無く立ったまま待機していただくことがよくありましたが、更新を機にフロアを広く使えるように配置し、人の動線を確保しました。

OnAir 3000に決めた理由としては、やはりラジオ局での先発採用社の圧倒的実績数でしょう。比較検討した他社には、つくりが充実した機種や視覚的に魅力的な機種もありましたが、誰が使うものかを一番に考え、ローカル局のひとつしかないメインスタジオ更新にあって、消極的理由かもしれませんが、間違えない選択をしなければ・・・という思いでした。とは言っても、初めてのデジタル卓で、その上外国製品。当初、メインスタジオに18フェーダーのみではコンパクト過ぎとも思いましたが、いざ稼働してみると、一部の不安をよそに、使い手の皆さんの反応は「わ

かりやすい」でした。音卓をよく知る人は、すぐにダイナミクスなど設定して自前の番組スナップショットを作ったりし、機械類の操作が苦手な人が初めての生本番でも、別に難なして。技術担当者が一週間立ち会ったのですが、何もすることがありません。予期せぬトラブルを想定し、緊急避難用のエマージェンシー卓を構えましたが、運用を開始してから半年で、エマージェンシー卓は忘れ去られています。

打合せ最終段階で、規模縮小の大幅な変更をお願いし、工事設計や日程確定はギリギリまでバタついてしまいました。ご尽力いただきましたスチューダー・ジャパン・ブロードキャスト様、工事関係者様、また、導入にあたり見学やご意見を拝聴させていただきました各ラジオ局様に御礼申し上げます。

